

学生による学生支援活動における課題

— 学生は何を課題と考えているのか —

西 本 佳 代 (教育・学生支援機構)

1. はじめに

2000年に示された文部省高等教育局報告「大学における学生生活の充実方策について」(以下「廣中レポート」という)以降、相次ぐ提言にもみられるように、近年、学生支援の重要性が指摘されている。そうした学生支援の中でも、特に注目を集めている取組として、学生による学生支援活動を挙げることができるだろう。学生による学生支援活動とは、学生相談におけるピア・サポートをはじめ、新入生に対する履修ガイダンス、聴覚障害を抱えた学生に対するノートテイクなど、学生が主体となり、学生に対して支援を行う活動である。2006年の調査によれば、学生相談に限ってもピア・サポート等学生同士で相互に支援する制度を実際に取り入れている国立大学は、実に三割にもものぼるといふ(日本学生支援機構 2006)。

こうした活動が注目される背景には、活動それぞれの要因も考えられるが、概して「教える側の学生が主体的に学ぶ姿勢や責任感を身に付けることができる」(廣中レポート)という点に期待が集まっていることは指摘できよう。従来の、学生を客体として捉える学生支援から、学生を支援行為の主体として位置づける学生支援へと転換することで、学生に多様な能力を身につけさせる取組が着目され、多くの大学で導入されているのである。

このような動きもあり、近年、学生による学生支援活動に関する研究も蓄積されつつある(金田 2000、杉村ほか 2006 など)。しかし、それらの多くは、学生による学生支援活動の実態を報告するにとどまっている。一部には、支援活動における改善点を指摘するものもみられるが、それについても大学側の論理で改善点が検討されており、実際に活動を行う学生の視点を考慮した上で改善点を提示するものはほとんどみられない。だが、支援主体となる学生の成長を十分に促進するためには、学生の視点、すなわち学生が支援活動において抱えている課題を検証した上で、それに沿ったサポートを行っていく必要がある。

そこで本稿は、学生による学生支援活動に参加する学生が、何を活動上の課題としてとらえているのか明らかにし、その課題に対して大学がどのようなサポートを実行しうるのか考察することを目的とする。それらの作業を通して、支援主体となる学生の成長を促進できるような、学生による学生支援活動に対する大学のサポートを提示できればと考える。

2. 調査の方法

本稿では、国立A大学の学生支援活動に参加する学生に対してインタビュー調査を実施した。しかし、調査の方法を詳細に示す前に、まず基礎的なデータとして、2008年7月に実施したアンケート調

査の結果から、国立A大学の学生が、学生による学生支援活動に対してどのような意識を抱いているのか概観したい。なお、国立A大学を調査対象としたのは、大学設置形態別にみた場合、最も学生による学生支援活動の導入が進んでいる国立大学における課題を明らかにすることは、その他の国立大学ばかりでなく、後続の大学に対しても有益な示唆を提示することになると考えたためである¹。

では、早速、国立A大学における、学生による学生支援活動への参加意識についてみてみよう。表1は、一年生対象に、学生支援活動への参加意識を問い、得られた回答の結果である²。その結果からは、学生による学生支援活動に実際に参加している学生は少ないものの、活動に対して肯定的な意見を持っている学生が多いことがうかがえた。具体的には、学生支援活動に「すでに参加している」は0.5%とわずかだが、「ぜひ参加したい」(4.5%)、「きっかけがあれば参加したい」(67.8%)、「すでに参加している」(0.5%)という肯定的な意見は72.8%と多数を占めている。

表1. 学生による学生支援活動への参加意識

	パーセント
ぜひ参加したい	4.5
きっかけがあれば参加したい	67.8
参加したいとは思わない	27.2
すでに参加している	0.5
合計	100 (1,158)

では、これら学生による学生支援活動に実際に参加している学生は、支援活動において、一体何を課題だと考えているのだろうか³。その点を明らかにするために、本稿ではインタビュー調査を用いた⁴。インタビュー調査を採用したのは、先にみたアンケート調査の結果からも明らかのように、学生支援活動に参加する学生が少ないため、量的な分析に向かないという理由が挙げられる。また、その点に加え、目的や対象を別とする個々の学生支援活動に参加する学生が、どのように活動上の課題を考えているのか詳細に分析するには、インタビュー調査の方が、より適しているという理由も挙げられる。

なおインタビュー調査は、2008年の10月から11月にかけて、国立A大学において学生による学生支援活動を行っている11名の学生（6団体）を対象に実施した。対象者は、一つの団体につき、代表の学生1名とその他のメンバー1名の2人とした（表2参照）⁵。

表2. インタビュー対象者の概要

団体名	団体の活動内容	インタビュー対象者名	所属学部 学 年	性別	団体内 の役割	備 考
団体Ⅰ	学生に必要なと考えられる情報・スキルを広く提供する団体。新入生対象の履修ガイダンスや学内カフェの企画・運営などを行う。参加学生は、1年生と3年生で、あわせて9人。	Aさん	教育学部 3年生	女性	代表	1年生の時から団体に所属している。
		Bさん	工学部 3年生	男性	メンバー	1年生の時から団体に所属している。
団体Ⅱ	留学生支援を目的とした団体。留学生と昼食をする機会を設けたり、歓送迎会を企画したりする。所属している学生は60人程度だが、実際に定期的に参加しているのは20人程度。	Cさん	経済学部 2年生	女性	代表	1年生の時から団体に所属している。
		Dさん	農学部 1年生	女性	メンバー	1年生の時から団体に所属している。
団体Ⅲ	学生の就職活動支援を行う団体。企業説明会や就職セミナーの企画・運営を行う。参加学生は、1年生から3年生まで、12人。全員が経済学部の所属。	Eさん	経済学部 3年生	男性	代表	3年生になってから団体に所属する。
		Fさん	経済学部 2年生	男性	メンバー	1年生の時から団体に所属している。来年度の代表候補。
団体Ⅳ	大学祭の企画・運営を行う団体。参加学生は、1年生から3年生まで、8人。通常、3年生は引退するが、今年は参加学生が少ないため、引退せずに活動を続けている。	Gさん	経済学部 3年生	男性	代表	2年生の夏から団体に所属している。
		Hさん	教育学部 1年生	女性	メンバー	1年生の春から団体に所属している。
団体Ⅴ	教育学部生と大学との間を仲介し、学生大会を催す。また、定期的に学内の清掃活動も企画している。参加学生は、3年生2人、2年生5人の7人。全員が教育学部の所属。	Iさん	教育学部 2年生	男性	代表	1年生の時から団体に所属している。
		Jさん	教育学部 2年生	女性	メンバー	1年生の時から団体に所属している。
団体Ⅵ	新入生を対象とした履修登録ガイダンスを企画・運営したり、学生生活についてまとめた冊子を作成したりしている。参加学生は、3年生3人、2年生1人のあわせて4人。	Kさん	教育学部 3年生	女性	まとめ役の一人	1年生の時から団体に所属している。

3. 学生支援活動に参加する学生の考える課題

学生による学生支援活動に参加する学生は、活動においてどのようなことを課題だと考えているのだろうか。その点を明らかにするために、以下では、彼らの考える課題を、①【メンバーの学生】と【代表の学生】が共通に考える課題と、②【代表の学生】が考える課題、と大きく分け、彼らの語りを見ていくこととする。

(1) 【メンバーの学生】と【代表の学生】が共通に考える課題

① イベントの企画

学生支援活動に参加する【メンバーの学生】と【代表の学生】が共通に考える、学生支援活動の課題として、大きく三つ挙げられる。まず、課題のひとつである、イベントの企画について検討したい。大学祭を企画・運営する団体Ⅳに所属するHさんと、教育学部生を対象にしたイベントを行う団体Ⅴに所属するJさんは、イベントの企画について次のように述べている。

H: 先輩の言うとおりにちょっと動いてしまったんかなーっていう所はあって、ま、その企画に携わってない先輩とかに対したら、まあ、そのなんていうんですかね。毎年同じもんを作っていくんじゃ楽しくないよ、っとは言われましたね。へへ。

*: ふーん。そっか。

H: ま、オリジナリティっていうんじゃないですけど、うーん、大学祭自体を誰が楽しむんかを考えて、まあ、動いてね、みたいなことは言われました。

*: 企画、企画というとはどうなんだろう？発想することとかも含めてっていうこと？

J: うん、発想、もう発想はなにか普通に思いつけば発想だと思うんですけど、そこから先に、実現可能な感じにしていくとか、どういうふうに道のり、プロセスとか、そのためには何が必要かとか、目的、目標とかそういうことを考えて、企画していかないといけないじゃないですか？で、その企画するってことは一人でやる、結構やるわけじゃなくて、いろんな人巻き込んでいくんでそういうことも考えつつ、難しいですよ。企画力って。

現在大学1年生であるHさんは、今年初めて大学祭の企画をした。その活動を振り返り、Hさんは「先輩の言うとおりにちょっと動いてしまった」という後悔があると述べている。また、先輩からのアドバイスを通して、いかに自分の独自性を大学祭の企画に入れるのかという点について考えている様子もうかがえる。

一方、Jさんは、Hさんより広義に企画する力を捉えている。上記のJさんの語りは、「企画力を身につけたい」というJさんの発言に対して、調査者が企画力の内容を問い、得られた回答である。そこでJさんは、企画する力とは、単に思いつくことだけではなく、「目的、目標」を定め、「いろんな人を巻き込んで」「実現可能な感じ」にしていくことだと説明している。ひとつのイベントを企画するにあたり、他の人に働きかける力や実行する力などさまざまな能力が必要だと考えている様子うかがえる。

これらHさん、Jさんの語りからは、イベントを企画することが、学生による学生支援活動を行う上での課題のひとつとなっていることが指摘できよう。国立A大学で行われている学生による学生支援活動には、イベントを通して行われる内容が比較的多い。そういったイベントは、実際に企画する学生にとって、多様な課題を抱きつつ、こなされる内容であることがうかがえる。

② 活動の宣伝

また、学生支援活動に参加する学生は、活動の宣伝をすることも課題であると考えている。先に見たイベントの企画は、立ち上げるまでの困難が大きい。しかし、それとは異なり、いったん企画が立ちあがった後、ルーティンとしてこなされるようになった例年通りのイベントや、活動内容について、宣伝することが課題となっていると考える学生もいる。次に、学生の就職活動を支援するイベントを企画・運営する団体Ⅲに所属するFさんと、学生を対象にしたカフェを運営する団体Ⅰに所属するBさんの語りを見てみよう。

F：なんか少ないときは困ります。あのガイダンスとかで。

— 中略 —

F：もっと、アピールしたらいいのとか、

*：あー。

F：今年から、(就職活動が) 厳しくなりますよとか、なんか、貴方はこのままで大丈夫なんですかとか。

B：人全然来ないんすよ。

*：うんうんうん。

B：はっきり言って、そのめっちゃ目立つ場所だったら、めっちゃ人来ると思うんすよね。

団体Ⅲは、学生の就職活動を支援するイベントを、比較的毎年同じ形で企画・運営する団体である。その団体Ⅲに所属するFさんは、就職ガイダンスなどに参加する学生が少ないため、困ることがあると述べている。そのため、団体Ⅲは、「今年から、厳しくなりますよ」や「貴方はこのままで大丈夫なんですか」という言葉を使い、宣伝方法を工夫した方がよいと考えているという。

こうした課題は、他の団体に所属する学生の語りにおいても見られた。団体Ⅰは、学生を対象としたカフェを立ちあげ、以前から学内で運営している。そうした活動を行う団体Ⅰに所属するBさんは、現在、団体Ⅰが運営するカフェに、他の学生が「全然来ない」ことが課題であると述べている。また、「めっちゃ目立つ場所だったら、めっちゃ人来る」と考え、カフェの場所や宣伝方法について模索しているという。

これらFさん、Bさんの語りからは、学生支援活動に参加する学生にとって、活動を宣伝することが大きな課題となっていることがうかがえる。イベントや施設の提供を通して、学生支援活動を行う団体は、他の学生が参加してくれなければ、支援することができない。しかし、提供するイベントや施設すべてに、必ずしも他の学生が十分に集まるわけではない。そのため、人を集めるための活動の宣伝は、学生支援活動に参加する学生にとって、活動を行う上での根本的な課題として認識されているのである。

③ 作業の手順

これまで、学生支援活動に参加する学生の課題として、イベントの企画、活動の宣伝について

見てきた。こうした課題に加え、学生支援活動をはじめたばかりの一年生にとっては、作業の手順を考えることすら困難な課題として捉えられていることがうかがえた。次に、学祭を企画・実行する団体Ⅳのメンバーで、学部一年生であるHさんの語りについて見てみたい。

H：こう結構、夏休みぐらまでは、ま、そのどっちか会議資料を作るとか、企画に携わるとかできるんですけど、やっぱり10月11月とか、近づいてきたら、やっぱりもうすることが優先順位として、あげられるわけじゃないですか。この日はもうこれまではしとかないかん、とかっていうのが。それを考えるんが、大変ですね。

ここで、Hさんは、学祭が近くなる10月、11月は、作業の優先順位を「考えるんが、大変」だったと述べている。これまで一度も活動内容を経験したことのない1年生メンバーにとっては、作業の優先順位をつけることすら困難な様子がうかがえる。

しかしながら、ここで留意しておきたいのは、こうした課題は、特に、活動の初期の段階の【メンバーの学生】が直面する傾向にある課題だということである。団体Ⅲの代表であるEさんは、自身の過去の活動を振り返り、次のように述べている。

E：段取りと申しますか、

*：うん。

E：そういった流れを知れたことがやっぱり大きいと思いますね。

これは、学生支援活動を通して成長した点について問うた調査者の質問に対するEさんの回答である。Eさんは、自身の活動を振り返り、「流れを知れたことがやっぱり大きい」と述べている。こうした発言は、Eさんが、活動の「流れが分からない」時期の葛藤を経験した上で語られるものだと考えられる。おそらくEさんも、先に見たHさん同様に、イベントを行っていく上での「段取り」や「流れ」を把握し、活動することが困難であると、活動に参加した初期の段階では感じていた。しかし、活動を通して経験を積むと共に、それらの困難はある程度克服され、今では、活動を通して成長した点として語られていると推察される。学生支援活動に参加する学生が考える作業の手順に関する課題は、学生支援活動に参加する学生の中でも、特に、初期の段階の学生が抱く傾向にある課題だといえるだろう。

以上、学生による学生支援活動に参加する【メンバーの学生】と【代表の学生】が考える共通の課題について概観してきた。そこから言えることは、【メンバーの学生】と【代表の学生】が考える共通の課題として、①イベントの企画、②活動の宣伝、③作業の手順、が挙げられるということである。では、学生による学生支援活動に参加する【メンバーの学生】と比した場合、特に、【代表の学生】が考える傾向にある課題として、どのような特徴がみられるのだろうか、次に見ていこう。

(2) 【代表の学生】が考える課題

① 適切な指示

学生による学生支援活動をまとめる【代表の学生】の語りでは、団体を運営するための課題が多く見られた。以下では、団体を運営するための課題を大きく三つに分け、見てみよう。まず、【代表の学生】が考える課題として検討したいのは、メンバーに対する適切な指示についてである。団体Ⅲの代表Eさんと団体ⅣのGさんは、次のように団体のまとめ役としての課題を述べている。

E：僕が仕事したがりと、ま、仕事したがりなんですけども、こう、積極的にこう、雑用とか自分でやろうとする面があるんですね。

*：うんうん。

E：で、そういった関係上、あまり指示が出せなかつたりするんですよ。

— 中略 —

E：あの、こう、(指示を出せないせいで後輩を) 不安がらせた、のがあったんだと、思います。

G：一番大変なのはやっぱり、人を動かすのが一番大変です

*：あー、一番上として、うん。

G：基本自体は、基本的には大学祭の仕事でもやれば終わる仕事がほとんどなので、そういうのはもうどンドンやっていけば終わるので、なかなか人をうまく動かしていくのは難しいな—と思って。

ここでEさんは、団体のまとめ役であるにも関わらず、自分は「仕事したがり」であり、「指示が出せなかつたり」と述べている。また、そのせいで、他のメンバーを「不安がらせた」という過去の失敗談を語っている。団体の【代表の学生】には、他のメンバーに対する適切な指示を出すことが要求され、それが彼らにとっての課題となっていることがうかがえる。

こうした課題は、団体Ⅳの代表であるGさんの語りからもうかがえた。大学祭を企画・運営する団体Ⅳの代表Gさんは、「人をうまく動かしていくのは難しい」と述べている。また、そのほかの大学祭の仕事は、「やれば終わる仕事がほとんど」と説明しており、通常の仕事より、他のメンバーの上に立ち、指示を出す作業の方が困難であると感じている様子もうかがえる。これら、Eさん、Gさんの語りから、他のメンバーに適切な指示を出すことが団体の【代表の学生】の課題となっていることが指摘できよう。

② 意欲喚起

Eさん、Gさんの語りからは、メンバーに適切な指示を出すことが、重要な課題となっていることがうかがえた。しかし、適切な指示を出すことが課題となるのは、参加メンバーが比較的意欲を持って活動を行っているという前提あつての話である。団体Ⅱや団体Ⅵの【代表の学生】からは、メンバーの活動へ対する意欲を喚起することが課題であるという意見が聞かれた。

C: それぞれのサークルに対する意識の低さ、たぶんこのサークルでもそうやと思うんですけど、来る人もおれば全く来ん人もおったりして、そういう意識が低く、ないがゆえに動かないかん時にぱっと動けんっていうのが一番ちょっと、歯がゆいです。

K: 皆頑張ってるのはわかるんですけど、やっぱなんかその差が、いろいろその(イベント名)にかけるその人の差、というか、優先順位がいろんな、ま、大学の勉強とか、他のサークルとか入ってきて、優先順位が人によって異なるんで、やっぱそのやってる人から見たらなんでこの人たちはやらないの?って見えますし、なんかそういうのでちょっと差が、差っていうか、なんかうまくまとまってなかった時期があったりとか、そういうつらい時期が結構あって、ま、そういう時は結構衝突したり、けんかとかいうか、言い合いになったりとか。

団体Ⅱの代表であるCさんは、団体Ⅱについて「来る人もおれば全く来ん人もおったり」する状況であると述べる。また、団体Ⅱへの参加意識が低いメンバーがいるため、行動すべきときに行動できず、「歯がゆい」思いをしているとも語っている。メンバーの活動への意欲を喚起することがCさんの課題となっている様子がうかがえる。

また、同様の意見は、団体Ⅵのまとめ役の一人であるKさんの語りからもうかがえた。団体Ⅵのまとめ役であるKさんは、活動を振り返り、「うまくまとまらなかった時期」、「つらい時期」があったと述べている。また、その背景には、団体Ⅵの主催するイベントに対する意欲が、メンバー間で異なっていたことが挙げられるという。これら、Cさん、Kさんの語りからは、団体をまとめる役割を担う【代表の学生】にとって、団体に参加するメンバーの意欲を喚起することが、重要な課題となっていることが指摘できるだろう。

③ メンバー確保

これまで、学生支援活動に参加する【代表の学生】が考える課題として、適切な指示、意欲喚起について見てきた。それらの課題は、学生による学生支援活動に参加するメンバーがいるという前提あつての話である。次に、検討したいのは、それらの課題の前段階ともいえる、メンバーを確保するという課題である。団体Ⅵのまとめ役の一人であるKさん、団体Ⅴの代表であるIさんは、次のように各々の団体の課題を述べている。

K: 問題は、やっぱ人数が少ないこと、になって一人、個人個人の負担が大きすぎるから、そのなかなかおさらその溝がその優先順位とかが出てきて

— 中略 —

人数が少ないのが今一番の問題なんです。

I: 教育学部生の前で挨拶があるんですけど、一人も入ってきてないんで今年、

*: あ—。

I: 自分の責任かなってちょっと思ってるんで(笑) 挨拶したのが自分なんで、ちょっとそこはやらないといけないかなと思ってます。

団体Ⅵのまとめ役の一人であるKさんは、団体Ⅵについて「人数が少ないのが今一番の問題」だと述べている。さらに、参加人数が少ないことによって、「個人個人の負担」が大きくなり、メンバー間の「溝」が一層拡大するとも説明している。学生による学生支援団体をまとめる学生にとって、メンバー確保が重要な課題となっていることがうかがえる。

また、こうした課題は、団体Ⅴの代表であるIさんの語りでも見られた。教育学部生から構成される団体Ⅴは、現在、3年生2人、2年生5人で活動しており、新一年生を入会させることができていない。その代表者であるIさんは、一年生の勧誘に失敗した背景には、教育学部生の前での挨拶が十分にできなかった「自分の責任」があると感じている。これら、Kさん、Iさんの語りから、団体をまとめる役割を持つ【代表の学生】にとって、参加メンバーを確保することが重要な課題となっているといえるだろう。

以上、学生による学生支援活動に参加する【メンバーの学生】と比した場合、特に、【代表の学生】が考える傾向にある課題について概観してきた。ここから言えることは、【代表の学生】が考える傾向にある課題には、①適切な指示、②意欲喚起、③メンバー確保、という団体を運営するための課題が見られるということである。

4. おわりに

これまで、学生による学生支援活動における課題を、①【メンバーの学生】と【代表の学生】が共通に考える課題と、②【代表の学生】が考える課題、とに大きく分け、概観してきた。そこから明らかになったことは、以下の通りである。

学生による学生支援活動に参加する【メンバーの学生】と【代表の学生】が共通に考える課題として、「イベントの企画」、「活動の宣伝」、「作業の手順」といった課題が挙げられる。一方、学生による学生支援活動をまとめる【代表の学生】が考える傾向にある課題としては、「適切な指示」、「意欲喚起」、「メンバー確保」といった課題が挙げられる。

これら、学生による学生支援活動に参加する学生の考える課題について考察すると、課題の内容を示す縦軸（「組織運営」―「企画運営」）と、課題を意識している主体を示す横軸（「メンバーの学生」―「代表の学生」）を設定することができる。その軸を用いて、学生による学生支援活動に参加する学生の考える課題の構造を示したものが、図1である。

この図1の結果からは、学生による学生支援活動に参加する学生の課題は、【メンバーの学生】と【代表の学生】が共通して考える、「イベントの企画」、「活動の宣伝」、「作業の手順」といった企画運営に関する課題と、【代表の学生】が考える、「メンバー確保」、「意欲喚起」、「適切な指示」といった組織運営に関する課題とに分類できることがわかる。この課題の分類を踏まえると、学生による学生支援活動に対して大学は、【メンバーの学生】と【代表の学生】の両者を対象とした企画運営に関するサポートを行う一方で、【代表の学生】に焦点を絞った組織運営に関するサポートを行う必要があるといえるだろう。

具体的には、【メンバーの学生】と【代表の学生】両者を対象とした企画運営に関するサポートとしては、研修が考えられる。課題として挙げられた、「イベントの企画」、「活動の宣伝」、「作業の手順」

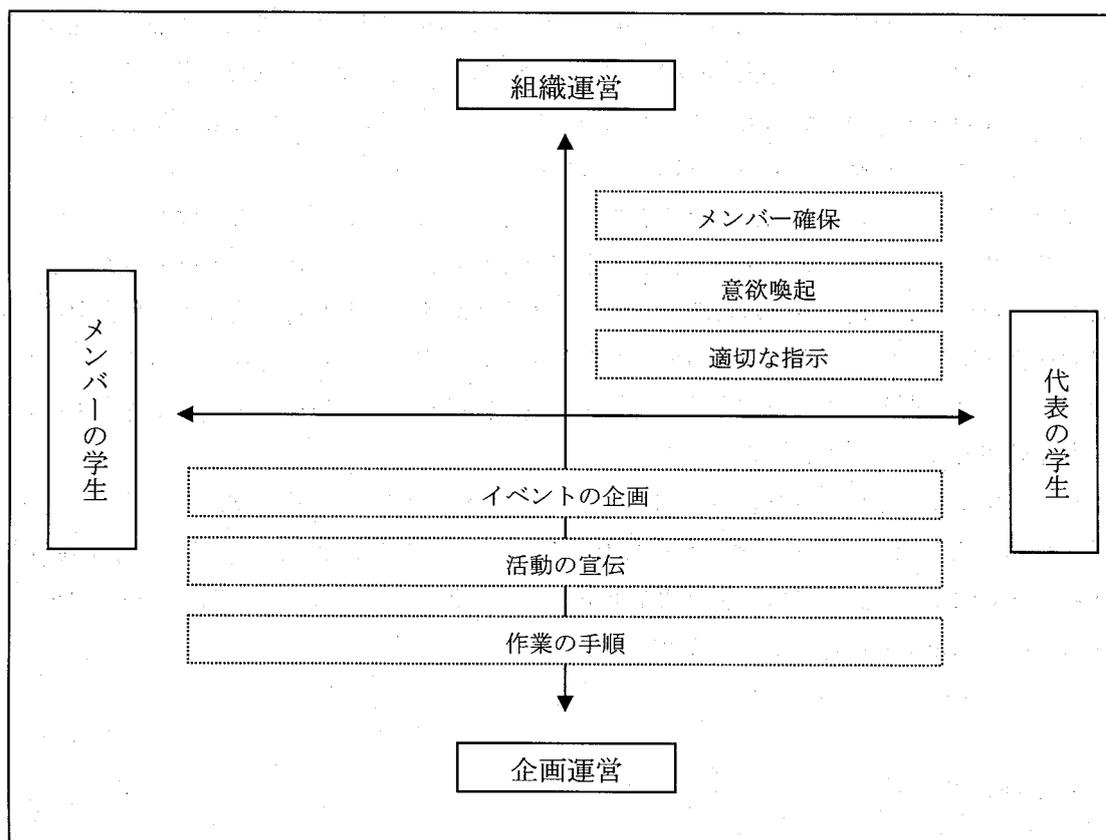


図1 学生による学生支援活動における課題

といった企画運営に関する内容を扱った研修を大学が提供することで、学生はそれらについての能力を育成することができると予想される。

一方、【代表の学生】に焦点を絞った組織運営に関するサポートとしては、研修と同時に研修以外の取組が必要となるだろう。組織運営に関する課題には、メンバーに対する「適切な指示」やメンバーの「意欲喚起」といった、リーダーシップ研修の内容として扱えるものがある。それらについては、研修を通して、【代表の学生】たちの能力を育成できると考えられる。

しかし、団体の代表が考える課題には、「メンバー確保」といった、リーダーシップ研修の範疇に入りきらないようなものがある。そのため、その課題に対しては、研修以外のサポートを行う必要があるだろう。例えば、全学的な活動の宣伝の機会を保証するのはもちろんのこと、学生による学生支援活動の意義を教える講義を提供し、教育活動の中にサポートを組み込んでいくことが重要になると考えられる。これらのサポートを有機的に組み合わせることによって、「メンバー確保」といった研修ではフォローしきれない課題を克服することが目指される。

以上、学生による学生支援活動に参加する学生の考える課題について概観し、それらに対する大学のサポートについて考察してきた。しかしながら、本調査は、国立A大学の学生を対象としており、本稿で得られた知見がその他の大学においても一般化できるのか検証できてきない。その点については今後の課題としたい。

参考文献

- 金田智子、2001、「学生ボランティア制度の現状と諸問題」広島大学留学生センター編『広島大学留学生センター紀要』(11)、47-58頁。
- 文部省高等教育局、2000、「大学における学生生活の充実方策について－学生の立場に立った大学を目指して」。
- (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/1outou/012/toushin/000601.htm (2008/12/1))
- 日本学生支援機構、2006、「大学等における学生生活支援の実態調査」調査報告。
- (<http://www.g-shiendb.jasso.go.jp/gsdb/main/tmp/contents/ab00141.html> (2008/12/1))
- 桜井厚、2001、『インタビューの社会学』せりか書房。
- 杉村和美・小倉正義・加藤大樹・松岡弥玲・山田奈保子、2007、「ペア相談と学生の主体性を取り入れた大学でのピア・サポート活動」日本青年心理学会青年心理学研究編集委員会編『青年心理学研究』(18)、51-62頁。

注

- 1) 日本学生支援機構(2006)によれば、学生相談においてピア・サポート等学生同士で相互に支援する制度を実際に取り入れている国立大学は33.3%、公立大学は3.2%、私立大学は11.0%となっている。
- 2) アンケート調査は、1,141人から回答が得られ、回収率は93.5%であった。
- 3) インタビューでは、学生が活動を通して身につけたいと考える能力を探るため、他のメンバーを評価する点や後輩指導における留意点などについても聞いている。本稿では、それらの中でも最も学生にとって切実な問題だと考えられる「現状の課題」を中心に挙げた。
- 4) インタビューの引用の表記は、桜井(2001)に準ずる。なお、*は調査者の発言である。
- 5) 団体VIについては、【メンバーの学生】へのインタビュー調査を実施できなかった。また、団体VIのIさんは、団体の代表ではなくまとめ役の一人であるが、代表と類似の仕事をしているという点から、ここでは【代表の学生】の一人として扱った。